

仙林寺だより

NO. 34
編集・発行
松田正貴

行事報告

寺子屋子供会

六月十九日、寺子屋が開催されました。今回は、寺子屋協力員宮内氏の紹介で、福島県森の案内人、菅野一さんご夫婦をお迎えし、クラフト製作を楽しみました。

どこにでもありそうな材料を工夫して、ブローチやペンダントヘッドなどを作りました。発想しだいで作品はまさに無限大の広がりを見せるのが子供の想像力、はじめは、課題の鉛筆製作に取り組みましたが、後半は、まさに15人総芸術家、柔軟な発想力に、講師の菅野さんも驚きの表情、ナイフやのこぎりの使い方もしっかり学習しました。

「危ないから使わせない」では、折角の想像力も膨らむ範囲が狭まりますね。

とは言え主催者としては大きな怪我もなく、実は正直ほっとしております。

休憩時間のお茶うけは、醤油ゆで卵、会員大槻君のご父兄より布施して頂きました。初めての味にこれまた大好評、皆で美味しく頂きました。有難うございました。

また、付き添いのご父兄方にも眼となり手となり足となりと、大活躍して頂きました。ここにあらためてお礼申し上げます。



刃物の使い方を学習



大好評！醤油卵

猫川観音太鼓開眼式

六月二十日十時より、猫川観音堂にて、太鼓の開眼式が行われました。猫川の観音様が当山の別当と言う事もあり、副住職が導師を務めさせて頂きました。

宝くじ基金事業による補助金と言う事ですが、地域の青年会各位による長年の努力と、町役場当局の推薦助力により新添された太鼓だそうです。大変立派な太鼓で、私も法要の後、打ち初めをさせて頂きました。

地域交流、世代間交流の重要性が叫ばれる昨今、それぞれの心をつなぐ何よりの宝物(ほつもつ)になるのではないのでしょうか。

「猫川では、昔、観音堂で鳴らすこの太鼓で時間を知らせたんだ」「あんたんとこの善次郎さんが専ら担当だったべ」

青年会の方々も初めて聞く話に興味がありそうかな？なさそうかな？

濡れ縁に鎮座します歴史が刻まれた古い太鼓を指差し、飛び出す話題に、早速世代間交流。

ここに子供さん世代が加われば古(いにしえ)の伝統に触れる絶好の機会となるでしょう。太鼓活躍の場が広がりそうです今後がますます楽しみです。

ちよこ一言

〈開眼〉

仏作って魂入れず、画竜点睛を欠く等という言い回し通り、すべての物には魂が宿るというアニミズム的な思想は、日本人の根底に根付いているようです。仏教的にどうかと言えば、三世十方の諸仏に降臨願い、僧侶の修行力で、その対象物と一体となり、心を手向ける事です。言い方を変えれば、皆様と物のいのちの大切さの縁の仲立ちが導師、その式が開眼式と言えましょうか。つまり、その式自体も単なる新調のセレモニーではなく、仏の教えに目覚める千載一隅の機会と捉えたものです。この度の太鼓も、その中に仏の教えを見出さなければなりません。

禅の道場では鐘や太鼓を鳴らし物と呼び、時を知らせる道具として使われます。無常迅速、生死事大、各宜醒覚、慎勿放逸、木版(もつぱん)という鳴らし物に書かれている偈文(げもん)ですが、人の夜はあつという間、生死は一大事です、心の目を覚ましましょう。無駄に時間を過ごしている場合ではありません。という意味でしょう。修行僧の最も眼に触れる所にしたためられた文言です。最も肝心な教えとして私達の心にも書き付けたいものです。気付いた時が、打ち初めです。